

或る農業研究員の 放浪記 (5)

さすらいの研究員

第5話 終戦から80年、谷田部・観音台の先史2

8月15日に終戦から80年を迎えました。今回は、観音台の地理的誕生と深く結びついた谷田部飛行場の誕生から太平洋戦争を通じた谷田部海軍航空隊の動きを紹介しました。終戦から長い月日が流れた今日、残念ながら航空隊の痕跡が多く残されているわけではありません。第5話では、当時の航空隊を訪問するとともにその跡地を巡り、残された記憶をたどりながら、80年前の谷田部・観音台における戦争の時代に接近しようと思います。

谷田部海軍航空隊の面影を追って

谷田部航空隊は軍事施設ですので、戦前・戦中は航空隊内の施設配置などは当然軍事機密でした。しかし、現在は戦史史料として公開されています。これを元にして当時の谷田部航空隊の本部地区の建物配置図を作成しました(図1)。参照した資料の一部は判読が難しく誤読した部分があるかもしれません。また、基地内の施設は短期間のうちに建設されたり取り壊されたりしていた可能性があります。そして、複数の建物配置図を参照しているため、図1はある一時期のものではなく、複数時期の施設配置が混在してしまっているかもしれません。一部では戦中もしくは終戦後数年間に撮影された空中写真を参照して建物や建物跡の配置と照合も行いましたが、整合のとれない事項も少なからずありました。そのため、正確さに欠ける記載があるかもしれません。あしからずご容赦ください。

また、建物の配置は建物配置図である程度はわかるのですが、当時の姿を知ることは、建物自体が残存している例もしくは写真が残されている限られた例を除くと大変難しいと思われます。それは、軍事施設における写真の検閲が極めて厳しかったためで、基地内での写真撮影は許可が必要であり、撮影対象にも厳しい制限があったことによります。そのため人物写真等の背景として偶然映り込んだ断片的な姿などから推測することになります。

...

さて、改めて谷田部街道(現在の国道354号線、通称:野田線)から航空隊に向かってみましょう。関東鉄道バス谷田部車庫や学園病院に入るT字路を入ると、この道はおそらく桜並木でした。これは、1948年12月4日に撮影された空中写真²⁾(図2)に映っている樹木の陰の形や濃淡からの推測です。街路樹は少なくとも針葉樹や常緑樹ではないはずです。

そして、第4話でも記したように、現在の学園病院の手前の四つ角のところに隊門がありました。隊門にあった門柱のひとつは、近所の家で解体された状態で保管されており³⁾、もうひとつの門柱は、新潟県十日町市にある円通寺で保存されています。円通寺で保存されている門柱については後で紹介したいと思います。

隊門を通ると、右側には木造の衛兵詰所があり、左側には鉄骨造りの車庫(図1①)がありました。兵士が出張や異動の際、陸路を取る場合は、当時、国鉄常磐線の荒川沖駅や土浦駅にトラックで移動するのが一般的だったようですので、隊員数が3,000名前後であったと

思われる航空隊（補遺参照）では、多くの車の出入りがあったかもしれませんが、終戦時には隊内に乗用自動車 8 台、トラック 5 台、消防車 2 台、救護自動車 1 台など合計 25 台⁴⁾の自動車がありました。

飛行場の隊門から向かって左手、航空隊の車庫が建っていた側の敷地は、現在、筑波学園病院になっています。筑波学園病院は、谷田部航空隊の跡に残された建物の一部を利用して、昭和 24 年 (1949) に結核の療養病院として開設されました⁵⁾。利用された建物は、航空隊で病舎として使用されていた建物（図 1 ②）で木造平屋建てでした。この建物は 1997 年まで病棟として使用され 1999 年に取り壊されました⁵⁾。なおこの病舎と類似する建物（谷田部のものは長辺長が約 10m ほど短い）が、阿見町の旧土浦航空隊内、現在（2025 年 8 月）の陸上自衛隊土浦武器学校内に残されています³⁾。土浦航空隊時代は谷田部と同様に医務科棟として使用されていました。

筑波学園病院の敷地の角付近（図 1 ①）には、現在「谷田部海軍航空隊記念碑」がありません（写真 1）。これは病院を運営する財団法人が、2013 年に戦争の記憶や平和の尊さを次世代に伝えるため建立したものです⁶⁾。記念碑の隣には隊員を見送ったともされる桜の古木が寄り添っています。ただし、過去の空中写真をみるとこの桜は当時のものではない可能性があります。



写真 1 谷田部海軍航空隊記念碑と桜の古木

衛兵の詰め所の背後には木造 2 階建ての堂々たる本部庁舎が建っていました（図 3）。本部庁舎の前には、国旗の掲揚台とともに海軍旗が高く掲げられていました⁷⁾。本部庁舎の隣には士官舎（図 1 ③）がありましたが、これは本部庁舎から遅れて建てられたようで、資料⁷⁾の本部庁舎の写真には士官舎が写っていません。しかし戦中、戦後の空中写真をみると本部庁舎の隣に屋根の形態や高さが類似した士官舎の存在を確認することができます（図 2）。資料⁴⁾には谷田川沿いの集落（房内、写真 5 地図）に半地下式の本部、士官舎、食堂、兵舎などの存在が記されています。確認が必要ですが空襲対策の一環と考えられます。

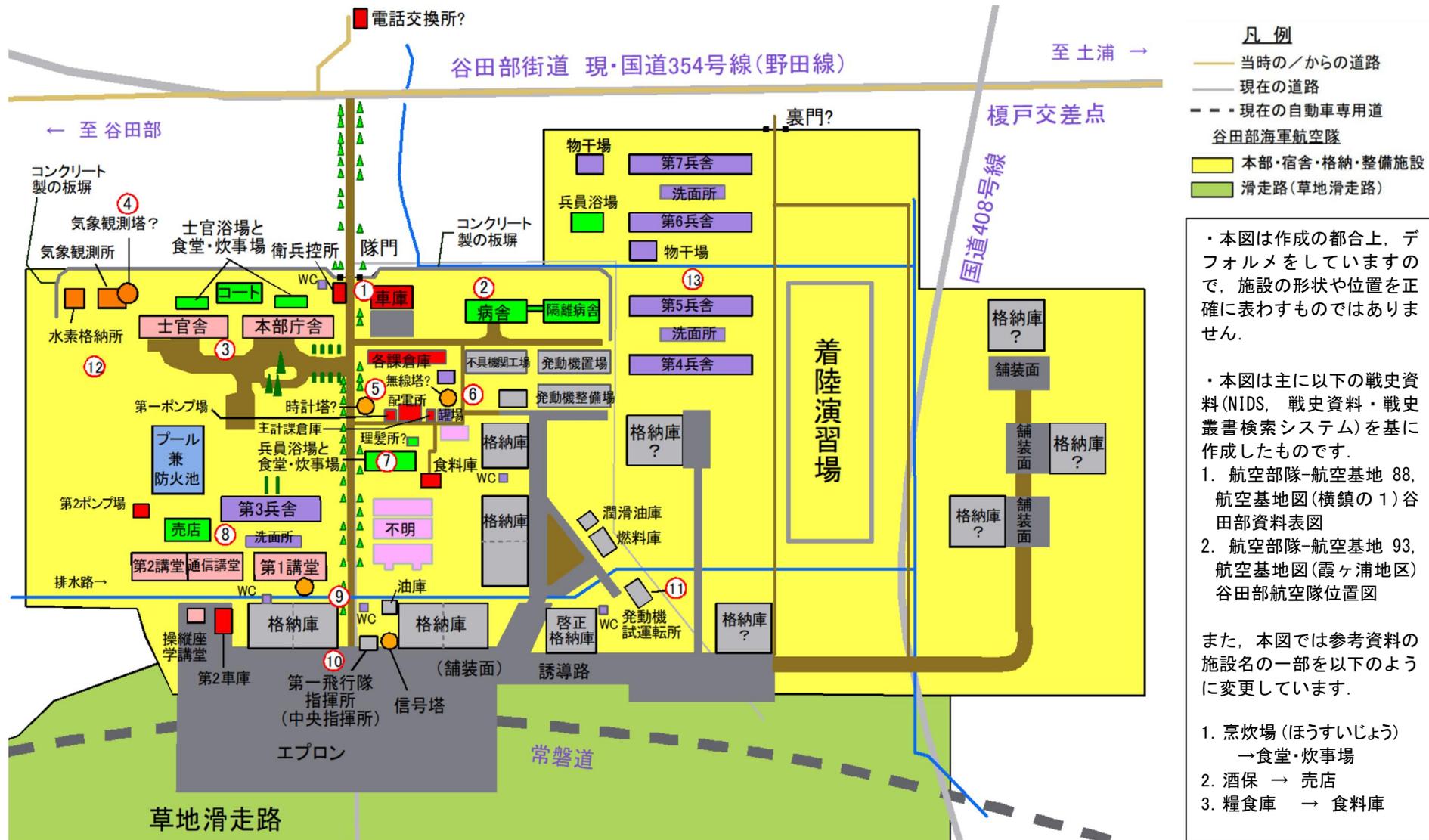


図1 谷田部海軍航空隊の主要部の施設・建物の配置

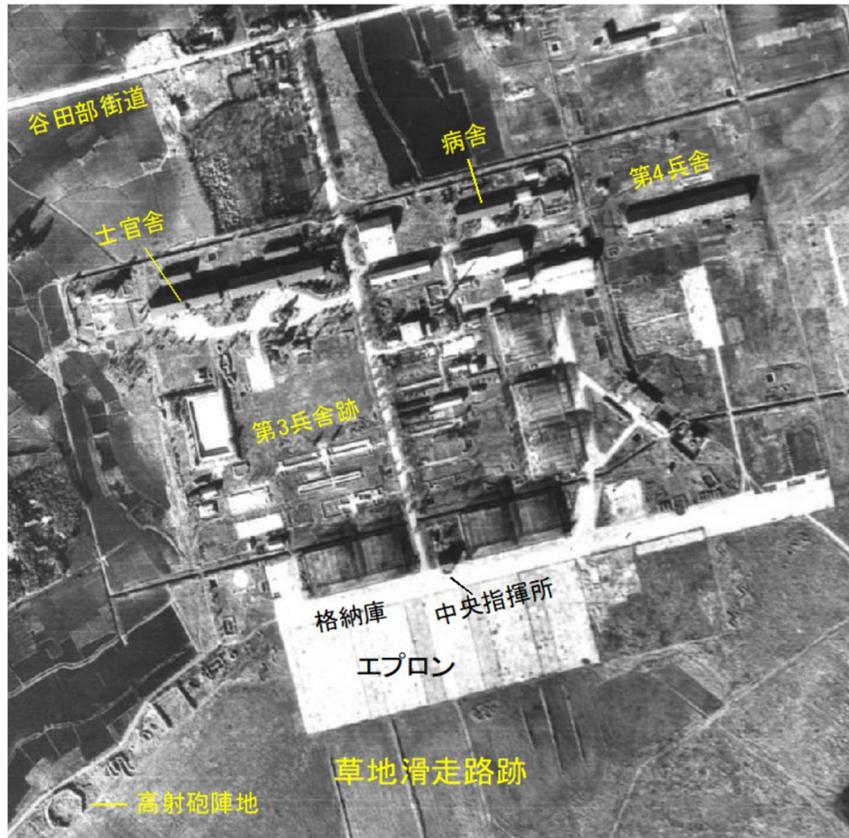


図2 戦後の空中写真でみる谷田部航空隊の主要部
空中写真は、国土地理院による。1948年12月4日撮影、USA-R2232-51



図3 谷田部航空隊の本部庁舎（手前）と士官舎（奥）
本部庁舎は資料⁷⁾⁸⁾等、士官舎は資料¹¹⁾を参照しました。図では見えませんが、士官舎の2Fの中央部には方形のベランダ¹¹⁾があり、滑走路の西側を見渡すことができました。

本部庁舎と士官舎の後方（現在のドラッグストア・スーパーマーケット側）には、士官用の食堂と調理場ならびに浴場がありました。また、空中写真（図2）をみると、写真の陰の長さからは士官舎の西側の奥には高さ16m程度*と推定される塔（図1④）が確認でき、これは気象観測施設かあるいは電信塔であった可能性があります。戦闘機搭乗員のひとりには士官舎の脇に高さ200m程度の電信塔（無線塔）があり、庁舎側から着陸する際には注意が必要だったと証言しています³⁾。気象観測所は木造二階建てで自記晴雨計や自記湿度計、自記風向計、自記風力計、雨量計、日照計、蒸発計などの観測機器が備えられていました。

*注：本部庁舎の高さを11.5mと想定した場合の試算です。

また、本部庁舎の東側には鉄塔の時計塔⁸⁾がありました。さきほどと同様に空中写真に写る陰の形状から推定すると時計塔のあった位置は図1⑤と思われます。さらにこの奥、図1の⑥地点には背の高い塔の存在が確認できます。図2の写真に写るこの塔の陰は他の建物にかかっているため、正確には面倒な計算を行う必要がありますが、他の空中写真なども参考にすると高さは少なくとも30m程度はあったのではないのでしょうか。これまで調べた範囲ではこの塔に関する証言や資料、写真などには行き当たらず、さらに施設配置図にも記載はありませんでした。もしかしたら航空隊における重要な機密事項だったのかもしれない。

隊門から現在の「飛行場橋」に続く道は桜並木でした³⁾⁹⁾。そのため谷田部街道から隊門を超えて飛行場のエプロンに至るまで連続した桜並木であった可能性があります。空中写真に写る陰の長さから代表的な桜の樹高を推定すると7.5m程度となりましたが、桜の品種をソメイヨシノと仮定して、ソメイヨシノの樹齢と樹高の関係式¹⁰⁾と照らし合わせると、樹齢は（バラツキは大きいのですが）15年前後と推定されます。これは開隊から空中写真が撮影されるまでの期間である15年と整合します。

道路沿いには、学園病院内の他に個人宅内にも桜の古木があります。この民家に残されている1本の桜は、以前は3本あったそうで航空隊の時代からのものです³⁾。

本部庁舎から桜並木沿いに南に向かうと、左手には兵員の食堂と浴場（図1⑦）があり、右手には（おそらく）木造2階建ての兵舎（第3兵舎）がありました（図1⑧）。詳細は後述しますが、この兵舎は戦後、荃崎中学校の校舎として移築された可能性があります。

この兵舎の奥には酒保（売店）がありました。酒保では、酒やたばこ、菓子類から、石けん・歯ブラシのような日用品、手帳や懐中時計などの軍務品、そして雑誌やハーモニカなどの娯楽品などが売られていました。現代のコンビニエンスストアのような存在ですね。さらに、その南側にはいくつかの講堂があり訓練生はここで座学を受けたようです。

谷田部航空隊の講堂には「パノラマ教室」⁸⁾がありました。パノラマ教室とは、大型パノラマスクリーンに地形や都市景観を描画し、実際に飛行機に乗らなくても航法訓練や戦術訓練が行えるよう工夫された室内型の視覚教材施設だったそうです。これは今日のフライトシミュレーターのはしりのようなものだったのでしょうか。

講堂の先、現在の常磐道の側道との交差点の少し手前に白いガードレールで塞がれた細長い空き地が左右に広がっています（写真2、図1⑨）。この空き地は基地建設時に造られた排水路の跡です。当時、この排水路を越えると、右側には大きな格納庫が建っており（図1⑩）、左側には多角形のベランダを持つ特徴ある木造2階建ての中央指揮所（第一航空隊指揮所）がありました（図4）。中央指揮所の東隣には信号塔（鉄塔）がありましたが、中央

指揮所の高さを 8.5m と仮定すると信号塔の高さは 16m 程度であったと考えられます。信号塔は、飛行機へ視覚的に合図や状況を伝えるものです、信号塔の東側にも格納庫がありました。格納庫はどちらも最大幅約 80 m×奥行き約 40 m の鉄骨造りの連棟型の大型格納庫でした。これらの格納庫や中央指揮所の前は舗装されたエプロンでした。出撃の際はエプロンに並んだ戦闘機が順次、草地滑走路に進んで離陸していきました。



写真2 排水路の跡（図1の地点⑨）とエプロン・滑走路に続く道

HP「思い出の記」¹³⁾によると、1945年4月7日* 14:00、谷田部基地から特攻隊の第一陣が飛び立つ際、航空隊の全員がエプロンに立って帽子を振って見送ったそうです。そして、当時の飛行長は中央指揮所の2階のベランダからいつまでも帽子を振って見送っていたとのこと。これは現在コンビニエンスストアが建っている敷地付近でのできごとです。谷田部から特攻隊が飛び立った日は桜が満開で、別離の宴は満開の桜の下で行われました³⁾。

注*4月8日との証言³⁾もあります。



図4 春の中央指揮所（左）と信号塔
参考資料 8), 9), 11), 12)に掲載の写真を参考に作成

さて、学園病院の方面から進んできた道路と常磐道の側道の交差点の南側が第4話で紹介した「飛行場橋」です。飛行場橋の対岸は農研機構などの敷地で、当時は草地滑走路でした。そして、常磐道の側道や常磐道の敷地の一部は、格納庫前のエプロンもしくは誘導路として舗装されていた部分です。交差点を東方向に左折して、中央指揮所や格納庫があった場所の前を通り過ぎると、左手前方向から来る道とぶつかる変則T字路があります。このT字路を左に曲がって道を北西方向に約80m進むと現在、左手に小さな神社があります(図1⑩)。これは谷田部神社といい、谷田部海軍航空隊神社が移築されたものです(写真3)。当時の神社は写真の神社の建物の中に安置されています。なお、神社が建立されたのは1944年10月のことで、戦時中は図1の⑫地点付近にあったようです⁹⁾。



写真3 谷田部神社

谷田部街道に近い北東側の区画(図1⑬)には大型の兵舎が並んでいました。これは兵舎に付された数字から推察すると、隊員の急増に対応して大戦後期に増設された兵舎と考えられます。4棟あったこれらの兵舎のうち第5～第7の3棟の兵舎は、終戦後3年を経た時点ですでに姿がありません(図2)。これらの兵舎の跡地には基礎の痕跡が見当たりませんから、簡易な構造であったことが推察できます。これと比較すると第3兵舎や講堂の建物の跡には基礎が残されていることから、これらは比較的早い時期にしっかり造られた建物であったと考えられます。

荃崎町史¹⁴⁾によると旧谷田部航空隊の兵舎の払い下げを受け荃崎中学校の校舎として移築したそうです。1948年11月8日に校舎の竣工式が行われていますので、図2の空中写真が撮影された1948年12月の時点では、谷田部から姿を消していた兵舎の一部がすでに荃崎町で再利用されていたこととなります。この旧兵舎は少なくとも1972年5月の新校舎の利用開始まで使用されたものと思われます。この校舎の大きさ(幅約16m×長さ約82m)から推察すると、移築されたのは第3兵舎ではなかったかと思われませんが確認はしていません。

兵舎はこれだけではありませんでした。戦争末期(1945年6月)に谷田部航空隊に異動した元隊員の証言¹⁵⁾によれば、割り当てられた兵舎は本部から遠く離れた滑走路の近くの林の中に設けられた地下壕だったそうです。地下壕は空襲を避けるために設けられていたとのことで、食事は一日3回、片道1.5km離れた炊事場に取りに行かなければならなかったそうです。また、資料³⁾には榎戸の民家に下宿していた整備兵の証言がみられます。

現在の谷田部に航空隊が存在した痕跡は多くはありません。残されているものは、記念碑や谷田部神社を除くと航空隊の敷地のコンクリート製の板塀の一部³⁾や防火水槽³⁾、格納庫の基礎の一部、そして無蓋掩体壕の一部は完全な姿ではないですが、現在でも高さ2m以上の土盛りとして残されています(保存・公開が望まれます)。しかし、前回の冒頭にも記したように、現在のつくば市観音台と若葉の全域、そして上横場と榎戸の一部の区画は、海軍航空隊の存在により形作られたものです。そのような意味でも谷田部航空隊は現代の谷田部・観音台や上横場などに大きな足跡を残しているといっても過言ではありません。

新潟県十日町に保存された谷田部航空隊の記憶

前述のとおり谷田部航空隊の隊門の門柱のうちの1本は新潟県十日町市の曹洞宗円通寺の境内に保存されています（写真4）。円通寺の当時の住職、渡邊賢一氏は元学徒兵で谷田部航空隊の特攻隊である昭和隊に選抜され、鹿児島島の鹿屋基地で出撃準備をして3回も遺書を書いたものの奇跡的に生き残られた方です。渡邊氏が1979年（昭和54年）に谷田部航空隊で過ごした同期戦没者の供養のため、寺の境内に慰霊碑を建てたことが縁となり、その3年後の1982年（昭和57年）、現地に放置され取り壊されようとしていた門柱が関係者の尽力により円通寺に移設、保存されたそうです。



写真4

- ↑ 航空隊の戦没者の慰霊の像（左）と
谷田部海軍航空隊の門柱（右）
- ← 昭和隊の隊員の名を刻んだ石碑
（新潟県十日町市 円通寺）

もう一つの戦跡

谷田部の近くにもう一つ、第二次大戦の戦跡があります。米軍 B29 の墜落の地です。1945 年 3 月 10 日未明、東京大空襲で爆弾投下を終えた B29 のうちの 1 機が撃墜され、観音台から南南西約 6 km のところにある原野（現在のつくばみらい市狸穴）に墜落しました¹⁶⁾。丘の中腹の林 1ha ほどが火災になったそうです。この B29 には 12 名の搭乗員がいましたが、9 名は墜落時に亡くなりました。生存していた米兵 3 名は消防団員等に救助され、早朝に警察署員より憲兵隊員に引き渡されました。墜落の地の近くの道路脇には石碑「B29 墜落平和の碑」（写真 5）が建てられています。



写真 5 B29 墜落平和の碑（つくばみらい市狸穴）【地理座標】 35.9863, 140.0782

おわりに

今回調べてみると、谷田部・観音台の地が思いのほか戦争と深く結びついていたことがわかりました。日本の戦争から時を経た今日でもウクライナ、ロシア、ガザ、イスラエル、シリア、イラン、インド、パキスタン、タイ、カンボジア、スーダンなど世界の多くの国々で戦争や紛争が起こっています。

日本では、終戦から 80 年の夏を迎えて当時を知る人の直接の声を聞くことがかなり難しくなっています。そう遠くない将来、谷田部・観音台の成り立ちに深くかかわる戦時中のことを知る人がいなくなってしまうかもしれません。しかし、そのような状況においても正確な歴史を知り、記録し、伝承していくことは、自分自身の立ち位置を確認したり社会の進むべき方向を考える上で大事なことと思われまます。

．．．

あの頃... 航空隊の隊門から続く桜並木だった道路の先、「飛行場橋」から観音台に続く道は、現在「農林さくら通り」と名付けられています。そして、毎年春には桜がいっぱいの花を咲かせ、多くの人々を楽しませてくれます（写真6）。桜は80年前の谷田部飛行場において当時の多くの関係者の記憶に刻まれた象徴的な花でしたが、農林団地の桜並木も美しい花を咲かせ続け、平和の象徴として末永く受け継がれていってほしいと思います。



写真6 農林研究団地（農林さくら通り）の桜

謝辞

新潟県十日町市の円通寺の前住職 渡邊真人氏には時間を割いて頂いて、貴重なお話を伺うとともに写真と資料の提供を受けました。ここに記して謝意を表します。

補遺

- ・谷田部航空隊の開隊当初の飛行場は1,200m四方⁹⁾とされていましたが、終戦時は1,800×1,300m¹⁷⁾に拡大されています。一方、当初の装備機と定数は、九三式中間練習機が108機、その後、1942年12月の定数は144機、1943年10月には162機、1944年2月には216機と増加しました⁹⁾。したがって、飛行場(滑走路)の範囲は段階的に拡張されたものと考えられます。
- ・1944年12月5日に神之池航空隊が移転してきた当初の戦闘機は零戦の他、紫電と雷電が5～6機づつ存在し、教官や教員の操縦訓練や防空任務に供されていました⁹⁾。しかし、重量のある雷電や紫電の草地滑走路での離着陸は難しく谷田部における運用は限定的でした。これらの戦闘機はその後、他の航空隊に転属し、終戦時に谷田部に残されていた飛行機は、零戦(6タイプ合計104機)と零式練習戦闘機57機、九三式中間練習機9機、九〇式機上作業練習機2機の合計172機⁹⁾でした。
- ・当時、谷田部航空隊にはどれくらいの方が勤務していたのでしょうか。1943年5月から1944年10月まで谷田部航空隊に勤務した飛行長の記述⁸⁾には隊員が三千人いたことを示唆する文章がみら

れます。内訳は正確にはわかりません（どこかに記録があるかもしれませんが...）。しかし、いくつか仮定をおくと以下のように推測できます。まず、初等飛行訓練を行っていた1944年秋頃を想定し、この時期に練習機が200機以上あったことに基づいて、飛行機と練習生の比が1:6、練習生と教官の比が10:1であったと仮定すると、練習生と教官を含めた搭乗員は1300名程度となります。また、整備兵を1200名⁹⁾とすると、その他高射砲などを扱う防空部隊、通信兵、司令部を含めた地上要員は500名程度であったと考えられます。なお、終戦時の谷田部の収容施設は士官176名、兵員3,400名分¹⁷⁾ありました。

- ・飛行場外の施設⁴⁾としては、送信所と発電所が谷田部台町にあり、弾薬庫(爆弾庫)は、飛行場の西方、(おそらくは谷田川沿いの崖線に掘られた横穴)にありました。銃弾庫は、近く使用が見込まれる銃弾は飛行場の東方約150mの敷地に保管されており、その他の銃弾は、台町藤塚、通横場、小野川の松林内、そして赤塚に分散保管されていました。また、食糧の保管は所内の施設や壕のほか、小野川や谷田部台町、福岡村などの(農業)倉庫を借りて保管されていたようです。
- ・前回、有蓋掩体壕はなかったのではないかと書きましたが、資料⁴⁾によると木造の有蓋掩体が5つありました。

参考・引用資料

- 1) 海軍航空本部? (1945頃?) 航空基地図(横鎮の1)谷田部資料表図, 航空基地図(霞ヶ浦地区) 谷田部航空隊位置図, 戦史資料・戦史叢書検索システム (NIDS)
- 2) 国土地理院, 地図・空中写真閲覧サービス
- 3) 茨城県立つくば工科高等学校放送委員会 (2007) 谷田部海軍航空隊の記録, DVD
- 4) 谷田部航空基地 (1945) 昭和20年10月9日引渡目録, JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C08011060700 (防衛省防衛研究所)
- 5) 筑波麓仁会 (2022) 広報誌 はばたけ, Winter Vol.1
<https://gakuen-hospital.or.jp/about/publicrelations.html> (2025/8 閲覧)
- 6) 茨城新聞クロスアイ (2013/5/20) 戦争の記憶後世に つくばの谷田部海軍航空隊跡地、関係者ら記念碑除幕, https://ibarakinews.jp/news/newsdetail.php?f_jun=13689590371307 (2025/8 閲覧)
- 7) 谷田部の歴史編さん委員会 (1975) 谷田部の歴史
- 8) 山本一哉編 (1980) 旧海軍全教育機関の記録/写真集 わが海軍(第6版), ノーベル書房
- 9) 渡辺洋二 (2003), 太平洋戦争史 谷田部軍航空隊「谷田部の空は零戦の空」(その1), 航空ファン 52(1), 105-120
- 10) 松江正彦・飯塚康雄・久保田小百合 (2013) 公園樹木管理の高度化に関する研究, 国土技術政策総合研究所 研究資料 41-47
<https://www.nilim.go.jp/lab/bcg/siryounn/tnn0623pdf/ks062308.pdf> (2025/8 閲覧)
- 11) 渡辺洋二 (2003), 太平洋戦争史 谷田部軍航空隊「谷田部の空は零戦の空」(その2), 航空ファン 52(2), 105-120
- 12) 小野清紀・渡辺洋二 (1990) 写真集・若桜たちは雲の彼方に, 雑誌 丸, 43(4), 525 巻
- 13) HP 思い出の記 或る零戦乗りの青春 <https://yama.hibi.muhen.jp/archives/3086/> (2025/8 閲覧)
- 14) 荃崎町史編さん委員会編 (1994) 荃崎町史
- 15) 高樋俊男 (1989) 桜会誌, 大桑村桜会
- 16) POW 研究会, 本土空襲の墜落米軍機と捕虜飛行士 東部軍管区
<http://www.powresearch.jp/jp/archive/pilot/tobu.html> (2025/8 閲覧)
- 17) 海軍航空本部? (1945?) 海軍航空基地現状表 (内地之部) (S20.8 調)